

YoRAP 2012-2013 「〈“女”同士の絆〉を考える」報告
〈“女”同士の絆〉と生き抜くこと
—アジア圏の「レズビアン」のつながりを考える—

コーディネーター

上田真央

ジェンダー研究センター 研究所助手

杵田光

ジェンダー研究センター 研究所助手

はじめに

2013年3月9日（土）、10日（日）、2012年度YoRAPウィークエンド・イベント『〈“女”同士の絆〉と生き抜くこと—アジア圏の「レズビアン」のつながりを考える—』が、国際基督教ダイアログハウス・国際会議室で開催された。ここでは、本イベントのコーディネーターである上田真央（国際基督教大学大学院、CGS助手）と、杵田光（一橋大学大学院、CGS助手）が、イベント企画の意図、またその概要の報告をする。なお、以下の報告文では、「イベント企画の趣旨」と「おわりに」を共同執筆し、Day 1は上田、Day 2は杵田が責任をもって執筆した。

イベント企画の趣旨

今回「〈“女”同士の絆〉について考える」という大枠の下、当初別個に企画された「OUT: ホモフォビアを叩きのめす！プロジェクト」の上映・監督来日講演という上田の企画と、時代背景の異なるレズビアン・コミュニティの活動からこれからの運動の可能性を考えるという杵田の企画を、1つのウィークエンド・イベントとして立ち上げることになった。「絆」という言葉は、東日本大震災を機に多用された、異性愛主義的/家父長的な意味を想起させる言葉でもある。本イベントでは、そのような「絆」に対抗するような〈“女”同士の絆〉にはどのような可能性があり、また何が困難となるのかを再考するきっかけにもしたいと考えた。さらに、生きづらさを抱える「女」にとっての、セー

ファースペースとしてのコミュニティが持つ意義を考える際に、従来の支援から取りこぼされやすいレズビアン・バイセクシュアル女性に関する性暴力被害の問題や、震災時（非日常）の問題などに思い当たった。以上のことから、そもそも「レズビアン」「女」とは何か、そして異性愛主義社会の中でどのように「つながり」、そして「生き抜くこと」ができるのかに関して、問題意識を共有し、話し合う場として本イベントを立ち上げた。

これまでCGSは、アジアのそれぞれの国・地域ごとに欧米のジェンダー・セクシュアリティ研究が受容されている傾向を打ち破るべく、研究者・アクティヴィスト間のネットワーキングを活動の柱の一つとしてきた。もちろん「レズビアン」や「女性」がおかれる社会背景はその地域や文化ごとに異なる。しかし、国内での共有にとどまらず、アジアという文脈の中でお互いの直面している問題や状況を共有することもときに重要なことだろう。そこで今回は、韓国と日本から「レズビアン」のつながりや〈“女”同士の絆〉をつくり、支援を行ってきた方々をお招きすることになった。

そんな中、本イベントを企画・運営するにあたり、内部者であり外部者でもある私たちの立ち位置はとて「あいまい」なものだった。大学の研究所が主催するイベントで、単に研究者の研究材料としてアクティビズムの話を書くというのではなく、生活に根差しているアクティビズムから研究者が学び、そしてその場に集う様々な立ち位置をもった人たちが、それぞれ「つながり」を再度作り上げていけるような「場」をつくるためにはどうしたらいいのか、ということを繰り返し考えさせられた。

本プログラムでは、1日目に「韓国ユース・レズビアンをつなぐを撮る」、2日目に「支援における〈“女”同士の絆〉を考えると」という2つのテーマ別にセッションを設けた。まず1日目には、韓国で制作されたドキュメンタリー映画「OUT: ホモフォビアを叩きのめす！プロジェクト」（2007）の上映（110分）に続き、韓国から本作品の制作者であるフェミニスト・ビデオ・アクティビズムWOM（ウム）の3名から、映画制作の背景、韓国ユースレズビアンたちが直面する問題・困難、「レズビアン」たちのつながりから生まれるエンパワメントについてのお話をうかがい（40分）、最後にフロアを含めたディスカッション（70分）を行った。イベント2日目は、それぞれ異なる時代背景

の中設立されたレズビアン・コミュニティから3名、そしてセクシュアル・マイノリティが直面する東日本大震災や性暴力に関する問題について2名から報告をしていただいた（各30分）。続くフロアディスカッションでは、登壇者に対する質問のほか、フロアを巻き込んだ自由な対話を行った（90分）。なお、両日ともに日本語/英語による同時通訳をつけての開催となった。

Day 1（3月9日、土曜日）

開会のあいさつ（13:00–13:10）

- ・田中かず子（国際基督教大学・CGSセンター長）
- ・上田真央

オープニング映画上映（13:10–15:00）

「OUT：ホモフォビアを叩きのめす！プロジェクト」（2007）

言語：韓国語/字幕：日本語、英語

休憩（15:00–15:15）

登壇者発表（15:15–15:45）

フェミニスト・ビデオ・アクティビズムWOM（ウム）

- ・LEE, Young（ディレクター）
- ・LEE, Hye-ran（プロデューサー）
- ・HONG, So-in（リサーチャー）

フロアディスカッション（15:45–17:00）

閉会のあいさつ（17:00–17:10）

- ・李田光

ICU LGBITサークルSumposion（シンポジオン）による活動報告

「Rainbow Voices from ICU・予告編」（2013）上映

・ Sumposion メンバー

Day 2 (3月10日、日曜日)

開会のあいさつ (12:30-12:40)

- ・ 杵田光

シンポジウム (12:40-15:45、各30分)

- ・ 若林苗子 (れ組スタジオ東京)
- ・ 大江千束 (LOUD)
- ・ 加澤世子 (レインボーコミュニティ coLLabo)
- ・ 岡田実穂 (レイプクライシス・ネットワーク、以下 RC-NET)
- ・ 内田有美 (性と人権ネットワーク ESTO)

フロアディスカッション (16:00-17:30)

閉会のあいさつ (17:30-17:40)

- ・ 上田真央

Day 1 : 「韓国ユース・レズビアンをつなかりを撮る」

2001年以降韓国で、ドキュメンタリー映画制作やメディア教育、政策提言、映画配給などに、フェミニストの立場から取り組んできたフェミニスト・ビデオ・アクティビズム WOM から3名をお招きした。本セッションではまず、オープニング上映として2007年に WOM が制作したドキュメンタリー映画「OUT: ホモフォビアを叩きのめす！プロジェクト」の上映を行い、ヨン監督より映画製作の背景、韓国のユース・レズビアンたちが直面する問題・困難、またそれらの状況を生み出す社会背景、映画製作を通してつながる世代を超えた「レズビアン」たちのつながりと、そこから生まれるエンパワメントについてお話ししていただいた。(映画・発表内容の詳細はNL16 アジアからのニュース「OUT、自分を見つける旅」を参照。)

本作品は、2005年に制作されたドキュメンタリー映画「学校のレズビアン

検閲」(Lesbian Censorship in School)の続編として制作された作品である。本編に登場する3人の登場人物(チョンジエ、チョイ、コマ)が、同性愛嫌悪渦巻く社会の中で日常的に受けてきた身体的・精神的暴力を、ビデオカメラを通して語っている。その語りと映像は、社会に対して10代のレズビアンが直面している現状を可視化させるだけでなく、彼女たち自身が自分たちの抱える葛藤と向き合うことで自己肯定していく変化をもとらえている。

2005年の段階で10代の「レズビアン」が置かれる状況に関する情報はとても限られていたため、WOMが独自の調査を行った。それによると、韓国社会では特に中学・高校において同性嫌悪が強い傾向にあることがわかった。同性愛が「一時的なもの」と認識されている状況の中、一時的なものだからと言って容認されるのではなく、攻撃の対象になっているという。とある学校では当時、レズビアンだと疑われる学生のブラックリストが存在し、リストに載った学生は教員から監視を受けるだけでなく、「レズビアンはまともではないから、早く更生させないといけない」という(全くもって意味不明な!)理由で学校側から友人と一緒にいることを禁止されたり、不当に罰を受けさせられたりと執拗な嫌がらせが日常的に行われ、時に懲戒処分として転校を強いられる例もあったという。同性愛に対する無知から生まれる嫌悪感は、「レズビアン」である(または「レズビアン」かもしれない)というだけで彼女たちの存在を社会の害悪とみなし、暴力的な行為を正当化しているのではないか。このような教育環境で孤立させられる彼女たちは、家族にも友達にも自分が直面している葛藤を相談できず、周囲に対して助けを求められない状況がつけられている。またそれは更に彼女たちの自尊心を奪い精神的に追い詰めるだけでなく、その苦しみが時に彼女たち自身の身体をも傷つける原因にもなっているのだ。

この作品の特徴は、彼女たちが抱える **agony** (苦悩) と向き合う過程が語りと映像から紡ぎだされていることだ。自分自身を撮る参加型の撮影方法(“self-directing”) で制作されている本作品は、3人の登場人物がそれぞれ主観的に自分たちのストーリーを語り、映画の筋立てを考え、撮影、編集、配給に渡るすべてのプロセスに参加している。この自分を撮りその語りを自身で編集するという行為を通して、自分の抱える葛藤を新たな視点で見つめ返すという作業は、再度自身の苦しみと向き合わなければならないという試練なのだ。

しかし同時に、それを乗り越え向き合うことで、自分の気持ちや思いを表現できるようにしているのではないだろうか。例えばコマの場合、撮影を通して自分自身に内面化されてしまったホモフォビアと向き合うことで、その過程を通して自分ができることは何かを考え、レズビアン・コミュニティで活動をしている年上のレズビアンたちと知り合い活動を共にし、信頼を築いていくことで、自分自身を受け入れることができたように思える。本編の3人から語られる痛烈なまでの怒りや悲しみ、孤独感や恐怖は、その語りや映像をみる「わたし（たち）」にも激しく突き刺さってきた。また、信頼できる人たちとの出会いやつながりから、それでも、だからこそ生き抜いてやるんだ、闘ってやるんだ、というような彼女たちの姿勢にとてもエンパワメントされたのではないだろうか。

プロテクションについて

監督のヨン氏は、映画製作の過程でまず登場人物3人の「安全」を最優先に考えたと言った。この点については安心できる場所づくりや活動を継続していくうえで欠かせないことだと思ったので明記しておきたい。まず、登場人物の彼女たちが作品中で「カミングアウト」することで、状況によってさらなる同性愛嫌悪的な嫌がらせを受ける危険が予想されていた。そのため、どの程度自分をカメラの前でさらけ出すのか、そして社会的な「カミングアウト」をいつするのかに関しては、彼女たち自身の意思を尊重していたという。そして、登場人物の3人が安心して主観的にストーリーを語ることのできる環境を整えるためには、彼女たちと制作グループとの間で「カミングアウト」をめぐる問題の認識を共有し、信頼関係の構築を行うことが必要とされていた。具体的には、必要に応じて制作グループが彼女たちの相談に乗ったり、セクシュアル・アイデンティティに関する情報や例を提示することで彼女たちが自分の人生に深く向き合い、傷を癒す方法を見つけられるように励ましたという。このように支援や信頼が根付いている空間が確保されていることで、映画制作を通して自分のセクシュアル・アイデンティティについて考えたり語ったりすることが可能となり、彼女たち自身が自分たちの変化と向き合うことにもつながったのではないだろうか。

ディスカッションについて

以下は、本セッションの後半に行われたフロアを含めたディスカッションで集中した内容について取り上げたい。まず、「本編に登場した3人のレズビアン

の状況は撮影後どう変わっていったのか」という質問がフロアから出された。それに対して監督は、本作品の制作過程で彼女たちは孤独ではないことを知り、撮影を通して世代を超えた仲間とつながることをきっかけにお互いの信頼を培うことで恐怖心を乗り越えられることを彼女たちは学んだと語った。具体的には、10代のレズビアンが自分たちの苦悩や葛藤と向き合いながら自分たちのストーリーを語れるように、30代のレズビアンがその語りのサポートをし、20代のレズビアンは、10代のレズビアンのために希望のメッセージを込めた歌を作曲し歌ったことなどがある（その曲は作品内でも使用されている）。この世代を超えた「レズビアン」のつながりは、登場人物の3人にとってだけでなく、韓国のレズビアン・コミュニティをつくる糧にもなったという。制作の段階では10代だった彼女たちは現在20代になり、この作品の制作から培われたつながりや経験をもとに、自分たちを支えてくれたコミュニティのために自分ができることを各自模索しているそうだ。

続いて、フロアより韓国における「レズビアン」をめぐるメディアの状況に関する質問が出た。これについて監督は、韓国においてドラマなどの市場メディアで表象されるのは、ゲイ男性やトランス女性が中心で、レズビアン

の表象はほぼないという。これに対してフロアから日本の状況についての応答があった。日本ではまず「レズビアン」というと、ヘテロセクシュアル男性の目線で作られたポルノグラフィーの印象が強い。さらに、男性中心的な商業主義のなかにある市場メディアではレズビアンが不可視にされており、その背景には「女」である「レズビアン」が市場経済から周縁化させられていることがあるのではないかと、ということも話された。一方で、商業主義に乗らない形で発信される作品の中には、レズビアン

の目線でつくられたものがたくさんあるという。

韓国と日本の「レズビアン」やそのコミュニティが置かれている状況にはそれぞれ違いもある。しかし、異性愛中心主義社会のなかで直面する「生きづらさ」や、アクティビズムを続けていくうえでの「つながり」の大切さなど、共

通する課題もみえてきた。イベント1日目に「OUT: ホモフォビアを叩きめす！プロジェクト」という作品と、WOMの方々とフロアの間やりとりで浮かび上がったこれらの論点は、引き続き2日目でも議論されることとなる。

Day 2: 「支援における “女” 同士の絆」を考える」

本セッションでは、設立された時代背景の異なるレズビアン・コミュニティである、れ組スタジオ東京(1987-)の若林苗子さん、LOUD(1995-)の大江千束さん、レインボーコミュニティ coLLabo(2009-)の加澤世子さん、そして性暴力の被害/加害を減らすために取り組んでいるRC-NET(レイプクライシス・ネットワーク)の岡田実穂さん、「東日本大震災におけるセクシュアルマイノリティの被災状況およびニーズ・課題に関する調査」を実施された性と人権ネットワークESTOの内田有美さんにお話ししていただいた。続くフロアディスカッションでは、登壇者に対する質問のほか、フロアを巻き込んだ自由な対話を行った。

若林苗子さん報告

若林さんははじめに、レズビアン運動に関わるようになったきっかけである、ウーマンリブとの出会いについて話された。学園闘争などの雰囲気なのか、社会に対する問題意識を少しずつ育てていた若林さんだったが、性差別の問題を考え始めるのは少し後になってからだったという。きっかけとなったのは、1970年の朝刊で報道された「ぐるーぶ闘う女」のデモの様子だ。そのスローガンである「お母さん、結婚って幸せ？」に共感して、グループに連絡をとったことを発端にウーマンリブに参加していくようになる。特に、運動を通して女同士本音で話すことで、女との信頼感を持てるようになり、制度としての「家族」「結婚」を女の視点で根本からとらえ返すことができたことは、画期的なことだった。

さらに75年から翌年にかけては渡米し、Feminist Women's Health Centerで訓練を受け、ヘルスワーカーとして働くこととなる。それまでリブの中でレズビアンの人たちに出会っても偏見を持っていたと語る若林さんだが、アメリカでは職場の同僚やルームメイトなどさまざまなレズビアンと交流するよ

うになることで、その偏見が少しずつ洗い流されていったという。その頃に、初めて女性を好きになり、レズビアンとして生きるようになった。このようなレズビアン・フェミニズムの気運の中、日本でもちょうど「リブ新宿センター」でレズビアンたちが集まり、「すばらしい女たち」（1977年）を作ったりと、レズビアン運動が芽吹き始めているところだった。若林さんは、ヘルスワーカーの経験を生かしてスペキュラムで子宮口をみる活動「女のからだティーチ・イン」などの活動をする傍ら、「れ組のごまめ」（1984-86）、そして「れ組スタジオ東京」（1987-）などのレズビアン運動にも参加していくようになる。

上記のような若林さんで自身のウーマンリブとレズビアン運動の関わりは、「れ組スタジオ・東京」それ自体の活動とも共通している点だ。れ組スタジオには、「女性解放とレズビアン解放が同じように大事だと思っていた人が多かった」といい、それは「れ組スタジオ東京」が「SOSHIREN 女（わたし）のからだから」などのウーマンリブの団体と共に、「女性解放合同事務所ジョキ」に事務所を構えていたことにも表れている。

「れ組スタジオ・東京」の活動の柱は3つある。それは、(1) 孤立して生きているレズビアンへの連帯をはかること、(2) 「女を愛する女」とは何者であるのか、自身で考えてその価値を見出していくこと、そして(3) 差別偏見をなくすために正しい情報を発信していくことの3つだ。とくに「アジア系レズビアン」とは誰のことなのかを問い直すきっかけともなった出来事として、1992年に「第2回アジア系レズビアンネットワーク（ALN）会議」を日本で開催した際のエピソードを紹介された。ALNの開会式では、日本からの参加者を紹介する際に、司会の人が「日本人のレズビアン立ってください」と紹介してしまい、在日コリアンをはじめとする日本に住む他のアジア系の人々を不可視にしてしまうような出来事が起きた。在日コリアンの参加者からの抗議を受け、若林さんは、改めて自身を含め、多くの日本人の中に「単一民族」幻想が根強くあること、日本に住む他のアジア系レズビアンと連帯していくことの重要性を深く考えるようになった。また、エイズ・パニックのころには、「エイズ予防法案を廃案にする女たちの会」を立ち上げ、OCCURとの協働での活動もしてきた。

「レズビアン」とは誰かということを常に問い続けながら、ときにゲイ男性とも協力しながら様々な活動をしてきた「れ組スタジオ・東京」だが、活動の主軸となってきたのが、毎月作り続けてきた機関紙「れ組通信」だ。2013年2月の最終号まで（最初期は手書きで！）実に294号を作り続けてきた。ただし、購読者数などの減少などもあり、2013年3月からは事務所を閉め、「れ組スタジオ・東京 online」（<http://regumi.sakura.ne.jp/retsushin>）での記事配信に移行する。

また、今後取り組むテーマである「オールド・レズビアン」について、印象的なエピソードを紹介された。一緒に活動していた若林さんの友人が70代になり、個室の老人ホームに入る際に、大好きだったレズビアン関係のビデオなどを全部処分したという。そして、その後老人ホームではクローゼットで過ごされた。活動をしていたとしても老後にはセクシュアリティを隠さざるを得ないという状況におかれてしまうことなど、「オールド・レズビアン」の課題は山積みだ。若林さんはれ組スタジオ東京の今後の展望として、オールド・レズビアンのための情報発信をしていくことを述べられ、お話を締められた。

大江千束さん報告

はじめに、大江さんは「レズビアンであること」とどう折り合いを付けてきたのかについて、ご自身の経験を話された。「レズビアン」ということに当初あまりいいイメージを持っていなかった若林さんに対して、大江さんは「レズビアンであること」を割とすんなりと受け容れられたという。そこには、当時好きだったミュージシャンたちが軒並みゲイ/バイセクシュアル宣言をしていたり、萩尾望都や竹宮恵子ら少年愛もの（BL）の作品に触れることができたりと、セクシュアリティを肯定できるような70年代の文化の影響がある。

このように自身のセクシュアリティとは折り合いをつけつつも、大江さんが自分以外のレズビアンと初めて出会った場合は、80年代の後半、れ組スタジオ東京だった。1986年の国際レズビアン会議に関する手記を読んでコミュニティの存在は知っていたものの、アクセスするまでに長い時間がかかったという。

そして大江さんは、れ組スタジオ東京にも触発される形で、30代以上を対象としたグループDARUMA（1994年-）をつくるようになった。この頃に

LOUDの存在を聞きつけ、いち参加者として参加するようになる。1997年頃に創設者である3名がそれぞれの理由でLOUDを離れることになり、事務所を今後どうしようかという話が出ていたところに、大江さんが運営を名乗り出ることになり、現在まで至っている。

LOUDは1995年の創設当初から「レズビアンやバイセクシュアルの女性ためのコミュニティ」を打ち出しているが、当初「バイセクシュアル」という言葉を使ったことは画期的なことだと言われたという。さらに、MtFトランスジェンダーも創立当初から参加していたという。大江さんの実感では、90年代に入ると、アイデンティティの新しい言葉/カテゴリーが耳に入るようになり、これまでレズビアン・コミュニティに属してはいたものの、何かしらの違和感を持っていた人たちがみられるようになってきた。昨年からLOUDでは、「性分化疾患を支援する会」やポリアモリーの非公開のミーティングが開催されるようになり、現在に至るまで、場を必要とするさまざまな人に開かれたスペースとして続いている。

最後に、震災のことも話された。震災の2日後には、LOUDで毎月行なわれている「オープン・デー」が予定されていた。移動手段も平常通りではない中で、開催を見送ったほうがよいのではないかとも思ったという。しかし、大江さんもやっとの思いでたどり着き、事務所を空けてみたところ6人の参加者があった。参加した人は一人暮らしの人が多く、テレビの情報ばかりに触れていて不安だったという人や、「日常の延長にある何も変わらないところに自分の身をおきたかった」と言っていた人がいた。また、LOUD維持会員への安否確認や、避難している方への家財道具の手配、「Lesbian Connection」というアメリカの団体からの寄付の仲介なども行い、これまで平時に築いてきたネットワークが結果的に支援にもつながることとなった。

大江さんは運営を通して、様々なセックス/ジェンダー/セクシュアリティの人たちとの出会いの中で、「女」「レズビアン」って何ということ問い続けてきた16年間だったという。今後も様々な人に開かれたスペースとしてのLOUDを継続させていきたいとお話を締めくくった。

加澤世子さん報告

レインボーコミュニティ **coLLabo** は、セクシュアル・マイノリティ全体で共有できる課題はもとより、「レズビアン」が抱える個別課題を解決するための取り組みに力を入れたいという思いがあり発足された。特に活動の柱としているのは、パートナーを探す時期、仕事に没頭する時期、老後などさまざまなライフステージに沿った支援である。

また、**coLLabo** は、「レズビアンと多様な女性たち（性的少数者）のための」活動をしている **NPO** 団体という表記を使っている。ここには、集う人たちの「多様な」姿を見据えつつ、「レズビアン」という言葉を手放さない **coLLabo** の姿勢が表れているといえるだろう。

「多様な」という言葉を入れた背景には、加澤さん自身が「レズビアン」という名乗りをするまでに時間がかかったという経緯がある。そこには、「レズビアン」という言葉に付随してくる「オンナ性」一性自認というよりもジェンダー規範への違和感があったという。このようにジェンダーやセクシュアリティのグラデーションを幅広くとらえつつも、同時に重要なことと考えているのが「レズビアン」という言葉を使っていくことだ。

10～20代の頃の加澤さんにとって、生きていくうえでロールモデルが見えなかったことも「レズビアン」という言葉への違和感を加速させていた。そんな中できっかけとなったのが、当時よく使われていた「ビアン」に代わって「レズビアン」と名乗って活動している人たちとの出会いだ。そういう人が先にいてくれたことで、「名付け/名乗りにぐらぐらしていた私を穏やかに変化させてくれた」と加澤さんは語る。

coLLabo の活動は、(1) エンパワメントやピアサポートを目的としたプログラムと、(2) 情報発信をすることで可視化し、埋もれがちなレズビアンに対する社会の理解を促す活動という2つのアプローチからなる。特に **coLLabo LINK** というプログラムでは、互いの交流の中でのエンパワメントが重視されている。また、各自が自分のことを振り返るきっかけを作り、セクシュアリティについて話し合える **Real Voice** ではピアサポート的な要素が組み込まれている。セクシュアル・マイノリティにとって、安心な場を提供するというコミュニティの役割は、1日目に登壇した **WOM** の映画制作の姿勢とも通じると

ころがあるといえよう。

加澤さんは、参加者同士に限らず、コミュニティを継続させていくために欠かせないスタッフ同士のエンパワメントという意味でも「ピアサポート」を重視している。最後に、「様々なセクシュアリティの人にとって生きやすい社会を作っていくこと」を見据えつつ、スタッフを含めた参加者が、活動を通して力づけられる経験を蓄えていける場にしたいという展望を語り、話を結んだ。

岡田実穂さん報告

レイプクライシス・ネットワーク（RC-NET）の岡田実穂さんは高校卒業後2003年から性暴力被害者支援に関わり、2009年に立ち上げたRC-NETの代表を務めている。岡田さんは、はじめに、性暴力被害者支援を初めて学んだ場であるサンフランシスコのBay Area Woman Against Rape（以下、BAWAR）で学んだ2つの重要な考えを紹介された。1つ目は、「性暴力被害は、セクシュアリティ、性別、年齢、階層に関わらずあらゆる人に対して起こりうる」ということである。2つ目は、「急性期」という言葉の捉え方である。日本では被害後3日から7日のあいだの医療的な支援が可能な時期を「急性期」として指すことが多い。しかし、60年前のことを思い出してパニックになることもある。よって、岡田さんにとっては、BAWARで学んだ「性暴力被害によって起るあらゆる症状がでているそのとき」が「急性期」だ。

では、実際の支援の現場はどのような状況にあるかということ、「セクシュアル・マイノリティや男性の被害者も存在する」ということを認識し、それを掲げて活動をしているところは、ほぼないと言ってよい。「まずは『女性』のことをやらなければ」という声によって、男性だけでなく、トランスジェンダーや、レズビアン/バイセクシュアル女性が後景化してしまう。岡田さんが言うように、「レズビアンのごとは後でやるから」という声で、繰り返し「女性」問題から排除されてきたのは、レズビアン運動が立ち上がってきた経緯とも繋がる点があるといえるだろう。

岡田さんはお話の途中に「みなさんにとって性暴力被害というものは身近なものですか？」とフロアに問いかけた。フロアでは、7～8割ほどの手が挙がる。セクシュアル・マイノリティの人が多い場では、通常の研修の3倍ほど手

が拳がるという。このことからセクシュアル・マイノリティと性暴力被害というものが決して切り離せない問題であることが伺える。

次いで、セクシュアリティに関する性暴力被害とその支援の困難性について話された。たとえば「レズビアン」であることを「治す」という名目で性暴力が行われることがあったり、また被害経験後もトランスジェンダーの場合「男の相談は受けられない」と声で判断されてしまい支援につながりにくいことがある。また支援につながれたとしても、シェルターでの共同生活を余儀なくされることがあり、これは同性から被害を受けた場合、フラッシュバックの誘因ともなるような過酷な状況におかれてしまうことを意味する。活動してきた10年間で出会った人たちの中には、チームでの支援ができなくて、個人で抱え込んでしまった事例もあったという。今でも正しい判断だったかどうかかわからない様々な「失敗」について語られた。

現在RC-NETでは、性被害経験のあるレズビアン/バイセクシュアル女性のためのお茶会である「レインボーカフェ」を開催している。レインボーカフェを始めてから岡田さんが感じるのは、自分自身のセクシュアリティゆえに、被害体験を話すことができなかったという人の多さだ。参加者からの「生きるということを諦めなくてもいいんだ、と思えるようになった」といった声を聞ける時が、岡田さんが活動を続けていく原動力にもなっている。

「すべての性暴力被害者のために」というのが岡田さんの原点だ。この意味で『『レズビアン・コミュニティのための』という形でコミットをして運営してきたわけではない」という。現在は「レズビアン・バイセクシュアルのための」という形で限定してレインボーカフェを開催しているが、今後はゲイやトランスジェンダーなどあらゆるジェンダー/セクシュアリティの人が話せる場を確保していきたいと展望を述べられた。

内田有美さん報告

内田有美さんは、震災時に顕在化したジェンダー/セクシュアリティにまつわる困難と、支援のあり方についての展望について報告された。はじめに、新聞に掲載された例などを取り上げ、震災であらわになったジェンダーの問題について述べられた。避難所では、女性には炊事が任されるなど、仕事を振り分

ける際に性別役割分業が再強化された傾向があった。また、避難所のリーダーには男性が多く、化粧品などは「贅沢なもの」「わがまま」とされてしまうことがあり、それぞれのニーズが「個人的なもの」として押しとどめられてしまう状況があった。さらに、震災後にDVの加害者のもとに帰ることを余儀なくされた方がいたことなどを報告した。また、性暴力被害に関しては、「セクシュアル・マイノリティだから」という理由から被害を訴えにくい風潮もあったと指摘する。就労問題に関していえば、宮城県では求人が増加したものの、それは土木/建築関連が多く、正規雇用に就くことも難しい状況がある。では、セクシュアル・マイノリティが直面した問題とはどのようなものだったのだろうか。

後半では、震災においてセクシュアル・マイノリティ当事者が困難および不安に思っていることについて、内田さんが行われた「東日本大震災におけるセクシュアルマイノリティの被災状況およびニーズ・課題に関する調査」から得られた結果をもとに発表された。なお調査は、2012年1月から10月にかけて行われ、被災3県と被災地以外の44都道府県でのwebアンケート調査と被災3県の当事者に対する対面での聞き取り調査の両方が実施された。

はじめに、避難所では、入浴施設や更衣室が性別で分けられているため、トランスジェンダーの人には利用しづらいという回答がみられた。また「家族」を一単位として区切ることが多いため、同性カップルの場合は仮設住宅への入居やその後のアパートへの入居について困難が生じた事例もあった。

医療については、仮設の診療所が整備されたものの、多くの受診者が訪れたために通常の診療が難しい状況だった。その中で、ホルモン療法が通常どおり受けられない事例があった。また、医療機関では、性別確認を何度も求められたり、同性パートナーの病状説明を受けることが難しかったり、遺体の引き取りができなかったりするのではないかという不安を持った当事者もいた。

また、支援については、「当事者支援団体からの支援を受けましたか」という質問を被災3県で聞いたところ、「知らなかった」と答えた人が多かったが、76%の人が必要性を感じていたという。そして、本人のカミングアウトの状況によって、当事者支援団体にどのような形で支援してもらいたいのかについての回答が異なったという。

以上の問題点は、内田さんの言葉を借りれば、震災後に新たに出てきた問題ではなく「平時からある問題が非常時に表面化したもの」として捉えることが必要である。これらの問題点を踏まえたうえで、ではどのような支援が望ましいのか、そして平時からどのような体制を整えておく必要があるのだろうか。

お話の最後に、内田さんは「シングル・イシューではなく複合的に問題に取り組むことが必要である」とうことを提起された。支援の質を高めるためには、女性のための/セクシュアル・マイノリティのための支援という形で、個々のニーズに答えていくことも必要だ。しかし同時に、連携できる課題に関しては、さまざまな団体同士がつながり、ワンストップで支援をしていくことができると、より広がりのある支援になるのではないだろうか。

ディスカッション

「震災から1年のタイミングに開催される本イベントに、いかに震災の問題を組み込むことができるか」、そして「各団体の活動紹介におわらないような、共通の課題設定がいかに行けるか」という点は、企画当初から課題だった。企画者は、それらに明確な答えが与えられないままに当日を迎えることとなったが、登壇者とフロアに救われる形で、ディスカッションは結果的に様々な論点を含み込むものとなった。

ディスカッションでは、5名の登壇者のお話を踏まえて質問がなされ、さらにいくつかのトピックについて、報告者とフロアとの間だけでなく、フロア間でも活発な議論がなされた。とくに、障がい・介護・医療福祉におけるケアとセクシュアル・マイノリティ、法律上の可視化について、東日本大震災のことや地方の課題について話題が集中した。これらのトピックについて、以下では簡潔に報告したい。

はじめに、ケアの領域においては、利用者とヘルパーの両者にとって、セクシュアル・マイノリティであること、そしてそれをカミングアウトすることが難しい状況にあることが話された。たとえば実際に、事業主に「セクシュアル・マイノリティであること」をカミングアウトをした時点で解雇にされたり、昇格が保留されたりするケースがあるということが、フロアから発言された。また医療・看護の教育の領域では、セクシュアル・マイノリティに対する

差別的発言がなされる場面もある一方で、ジェンダー・セクシュアリティに配慮した講義の取り組みもなされ始めていることが共有された。

続いて、ソインさんからは、韓国では法制度の整備に運動がシフトしつつあり、それに伴ってクィア性が消されてしまっている現状があるということが提起された。そして、「日本のセクシュアル・マイノリティの運動はどのような展開をみせているのか」という質問が投げかけられた。この質問を皮切りに、法律上のセクシュアル・マイノリティの可視化についても活発な議論が交わされた。

はじめに、日本では性同一性障がいの運動が特例法を勝ち取ってきたが、「トランスジェンダー/トランスセクシュアル」の中でも特例法に対する反応は一枚岩ではないということが論点に上がった。さらにパートナーシップ制度について、そのような法の整備によって「婚姻制度」それ自体の解体の可能性も考える一方で、マジョリティの規範に取り込まれてしまう危険性があることが提起された。また、ジェンダーによる賃金格差/雇用格差などがあるなかで、生活保護法改正などの動きも注視していく必要性が発言された。さらに、多くの団体が連携してロビーイング活動を行ったことなどが功を奏して「自殺総合対策大綱」に性的マイノリティが書き込まれたこと、そしてDV法の保護対象者に男性が含まれたことについても取り上げられた。このように暴力被害ということを考えるとき、これまで法律上に含まれなかった層が書き込まれることの意義は大きい。ただ、このように法律上に様々な層が包摂される過程において、「法律の中心に当事者がいること」が重要であろうということが提起された。

3つめの論点として、震災や東京以外の地方の状況について意見が交わされた。地方と都市では、カミングアウトをすることや自分のしたい恰好をすることへのハードルの違いが存在している。そのような差異を意識したうえで、被災地とその他の地域で連携しながら支援を進めていくことが望ましいということが語られた。さらに、地域の防災計画などを作っていく過程においても、内田さんの調査でみられたような被災地の現状を踏まえたうえで法律をつくっていくことが必要であろうという発言もなされた。

以上のように、各論点については明確な結論は得られなかったが、ディスカッションの中でキーワードとして出てきたものとして、大江さんが口火を

切った「両輪」という言葉を挙げたい。今回ディスカッションや各登壇者の報告で改めて浮き彫りになったことは、「セクシュアル・マイノリティの課題」を考えると、同時にケア・性暴力・労働問題・エスニシティによる差異などあらゆる社会問題と接合することが不可欠であるということだ。ときには、両輪どころか、それ以上の車輪を同時にまわすことが必要な局面があるだろう。それは震災で浮かび上がってきた「シングル・イシューではなくて、複合的な視点が必要である」という内田さんの提起ともつながる重要な視点であり、今後議論を積み重ねていくことが必要であろう。

さいごに

今回、このような2日間に渡るイベントを開催することができたのは、これまで草の根の活動や研究など様々な形で、たくさんの人たちが積み重ねてきた「つながり」があったからに他ならない。イベントを初めて企画・運営するという心もとない状況の中、両日の登壇者の方には快く依頼をお引き受けいただき、これまでレズビアン・コミュニティや活動に関わってきた方々にも多くの助言をいただいた。また、田中かず子先生をはじめとするCGSスタッフの方々には、企画を練り上げる過程でいただいたアドバイスから新たな視点に気づかせていただいただけでなく、精神的にも支えてもらえたことで、最終的な形にまとめることができた。

岡田さんがおっしゃったように、いままでずっと活動されてきた方の背中が一つねにそこに存在しているにも関わらず一見えにくくなってしまっている、あるいは見えている気がしないという認識は、企画当初の私たちにも共通する問題意識でもあった。本イベントの成果を1つ挙げるとすれば、WOMが映画制作を通して築いたような、世代を超えた「女」同士のつながりの大切さを改めて感じる事ができたことと言えるだろう。そして、異性愛主義社会を生き抜くための連帯・ネットワーク構築の可能性を参加者のみなさまと共に探りたい、という思いのもとに企画したこのイベントは、今後「アジア」におけるセクシュアリティをテーマとしたネットワークを構築していくためのキックオフ・イベントとしてまず大切な1歩を踏み出せたのではないだろうか。今回関わった全ての方々には心から感謝申し上げたい。

**Report: YoRAP 2012–2013 “Thinking about <Bonds Between ‘Women’>”
Event “Overcoming Hardships with <Bonds Between ‘Women’>:
Thinking about the ‘Lesbian’ Network in Asia”
Tuesday, 15th January, 2013**

Coordinators
Habiba-Mao UEDA
Center for Gender Studies, Research Institute Assistant
Hikari MOKUTA
Center for Gender Studies, Research Institute Assistant

On March 9th and 10th, 2013, YoRAP’s weekend event “Overcoming Hardships with <Bonds Between ‘Women’>: Thinking about the ‘Lesbian’ Network in Asia” was held at the International Conference Room in ICU Dialogue House. The word “bond” reminds us of a heteronormative and patriarchal context that was often utilized to support the Great Eastern Japan Earthquake relief. This event aimed to reconsider the possibility and hardships of the <bonds between ‘women’>, which opposes that oppressive kind of “bond,” what it means to be a “lesbian” and a “woman” living in this society, and sharing thoughts as to how “women” can connect and survive with in heteronormative society. The primary purpose was to share problems and situations as “women” in the context of Asia, thus we invited activists from Japan and Korea who have built and continue to sustain the <bonds between ‘women’> and support the connections of “lesbians.”

One of the achievements of this event was that we reaffirmed the importance of the bonds between “women” through out the generations. Hence, this event was a trigger to create a connection to a future theme (Sexuality in “Asia”), the purpose of which was to find out the possibility of constructing a network in order to survive heteronormative society.

Agenda:

Day 1 (March 9, 2013)

Opening (13:00–13:10)

- Kazuko TANAKA (International Christian University / founder of CGS)
- Habiba-Mao UEDA

Opening Documentary Film (13:10–15:00)

“OUT: Smashing Homophobia Project” (2007)

Language: Korean/subtitles in Jp/En

Break (15:00–15:15)

Presentation (15:15–15:45)

Feminist Video Activism WOM

- LEE, Young (Director)
- LEE, Hye-ran (Producer)
- HONG, So-in (Researcher)

Floor Discussion (15:45–17:00)

Closing (17:00–17:10)

- Hikari MOKUTA

ICU LGBT Circle: Sumposion

「Rainbow Voices from ICU・Preview」(2013)

- Sumposion members

Day 2 (March 10, 2013)

Opening (12:30–12:40)

- Hikari MOKUTA

Symposium (12:40–15:45、 30 minutes each)

- WAKABAYASHI, Naeko (Regumi Studio Tokyo)
- Chizuka OE (LOUD)
- Seiko KAZAWA (Rainbow Community coLLabo)
- Miho OKADA (Rape Crisis Network: RC-NET)
- Yumi UCHIDA (Sexuality and Human Rights Network ESTO)

Floor Discussion (16:00–17:30)

Closing (17:30–17:40)

- Habiba-Mao UEDA